

## 20 風刺画家：ジョルジュ・ビゴー

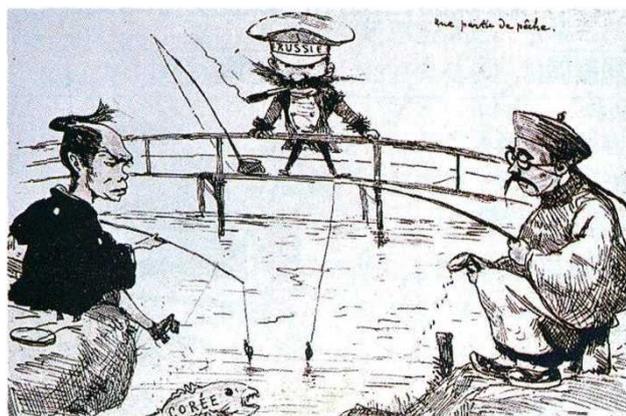
ジョルジュ・ビゴー（1860-1927）は、1872年に国立美術学校（Ecole des Beaux-Arts）に入学しましたが、家計を助けるために1876年に退学して、挿絵の仕事を始めました。仕事を通して出会った日本愛好家（ジャポニザン）の影響で日本へ憧れを持つようになり、1882年から2年間、士官学校で絵画を教えるお雇い外国人として日本に滞在しました。当時は写真の信頼性が低かったことから、士官学校では写生技術を教える授業がありました。



Georges Ferdinand BIGOT  
ジョルジュ・ビゴー

ビゴーは、1887年に横浜の外国人居留地に住むフランス人向けに漫画雑誌「TÔBAÉ」を創刊しました。この雑誌の名前は、浮世絵の一つの様式で「江戸の漫画」とも言われる鳥羽絵に由来します。ビゴーは、版画やスケッチによって、当時の日本の世相を表した風刺画を描きました。

雑誌「TÔBAÉ」の創刊号に「漁夫の利（原題は魚釣り遊び）」（une partie de pêcheur）と題する風刺画が掲載されました。これは、対立していた日本と中国（清）が朝鮮という魚を狙い、釣り上げられた魚を横取りしようとするロシアを描いています。この絵は、日清戦争（1894-1895）前の当時の情勢を描いた風刺画として、日本の教科書に載っています。ビゴーの名前は知らなくても、日本人にはよく知られた絵です。



風刺画ですので実際よりも誇張して描かれてはいますが、現代では、ビゴーが残した多くの絵は、当時のヨーロッパ人の日本人に対する見方や当時の人々の生活の様子を知る貴重な史料となっています。

掲載日：2022年11月3日